

お正月に旅行に行かれた方も多いのではないでしょうか。さて、現代は文化を語る時代と言われます。テレビや新聞などで、「日本の文化は…」とか、「日本の料理は…」と聞く機会も非常に多いです。また私たち自身もテレビや海外旅行を通じて、国外の文化を知ること、日本の文化や国外の文化を語ることも多いです。特に日本各地のことであれ、海外のことであれ、旅行で経験したことを思い出として語る人に良く出会います。私はこのこと自体は良いことで、自分たちの良いところ、悪いところを知る一つのきっかけになると思っています。



ただ、その時に気を付けてほしいことがあります。自分の見たこと、経験したことが、その旅行先の社会の全てではないということです。ある研究者は観光を、「自分の知っていることを確認する作業」と言いました。つまり、私たちは旅行に行く前にパンフレットやガイドブックなどで、旅行先の情報を手に入れ、それを楽しみに行くわけです。私も教科書に載っている原爆ドームを自分の目で見た時は、広島に来たことを実感しました。それが何を意味しているかという

と、人は見たいものだけ見て帰るということです。中国に行けば万里の長城や天安門広場を見て帰るみたいな感じです。

でも逆に考えてみましょう。外国人観光客が体験する日本、例えば、浅草や京都、秋葉原は日本のほんの一部です。これらだけが日本だと思われても困ります。それだけに、自分が見てきたことを語る時に、少し謙虚な気持ちが必要です。自分が見てきたものはその社会の「ほんの一部」、そして「見たいものを見てきた」のだと。そう思って語るだけでも、その社会をステレオタイプで理解することがなくなります。東京も日本、安芸高田市も日本なのです。

文：県立広島大学 上水流久彦 講師

イラスト：県立広島大学 ロナルド・スチュワート 准教授

2015(平成27)年 広報あきたかた 1月号掲載